



重修真書太閤記

八編
七



へ18 符
門 459
卷 77

消
福 兼

重修真書太閤記八編卷之十九

柴田勝家軍勢催役の事

荒前田父子密謀出陣の事

神戶侍從信孝朝臣ハ血氣の勇ヲ任せ羽柴筑前守
を討滅目さん為小切上りんと逸られけるを平
田國分嶺三老臣ハ諫められ是を思ひ止まると云
共猶其憤怒の氣を制しあひ遂ハ岐阜小籠城す抑
岐阜ハ故右大臣殿の執し思召ける名城ハして舎
兄中將殿の居城あり然るを爰ハ楯籠り此城ハ敵
を引受んと父兄の為小恐びざる所あるを何と由

同 會
攻 印

大月已八編卷之十九

思ハざるハ思義を弁へざる人と云べし筑前守ハ
此理を思ふが故に岐阜に向て長柄の川を渉らん
美濃守を以て之を圍むと雖只遠巻ゆりて
矢玉を放さざりしを筑前守主君の思を忘れず
礼有り義有り云べし信孝朝臣已に思慮洩く再
度の籠城及びおがり筑前守の大勢の氣をうば
それ龍川左近將監ハ筑前守に攻られかつ土一揆
の蜂起を案し兵を起し境を越ると能はず因り
岐阜の加勢ハ論お及びむと聞て彌憑む木の下ゆ
雨のゆる心地せられ今ハ越前の柴田が許へ注進
櫛の齒を引が如く援兵を出さんとを告られらる

小より柴田修理進勝家大に憤ふり先ハ深雪の
道を塞がれ岐阜の手合延引せし故に三法師君舎
弟の若君を筑前守に奪われ加之かりゆ家僕同
様ある筑前守に和議を乞せしと信孝朝臣一人の
恥辱おりず全く勝家が恥あり京童の口の悪さ
ハ無き勝家を云甲斐あしと笑ふらんいづ討出
て再度の恥を雪むべしとて回文を以て幕下の諸
將を催促しける柴田ハ北陸七ヶ國の管領を賜ハ
りつれ共越後佐渡ハ上杉の分國ゆり力及はず
加賀能登越前越中の輩ハ何れも其下知小背く者
あり中ハ能登七尾の城主前田孫四郎利長ハ回

七月二十八日

二

文の從ひ手勢を卒し柴田が許へ馳上りたるを
便宜よけれはまづ越前府中の城へ入り父の又左
衛門尉利家小面會す又左衛門尉利家の柴田が偏
執嫉妬深くして君恩を思はず自己の意を立んと
を主として忠臣の道は疎まざるを惡み此程病氣と
稱して閉こりて天下の時變を考へ居たりけるが
果して三七殿謀叛して筑前守の攻詰られ漸やく
其力敵せざるを知り恥辱を忘れ和平を請其旨の
未ど乾りざるは再度籠城し瀧川柴田の加勢をた
のむ筑前守の臣あり然れ共諸將は從ひ三七殿
ハ右大臣家の御子あり君あり然るは一人も是の

参り加ふる人あり其理いか小と云ふ筑前守ハ正
統正嫡の君を奉り順を以て天下を令す三七殿ハ
逆を以て國を争ひあふ順と逆との結目かくの如
く天小違ひ人小違ふ我北國小居を以て柴田が與
力とると云共何を順を去て逆の從ひ却て其家を
失ふべけんや今暫時世のあり行を見物し其のち
出陣する共おそかりと日夜小勢州濃州の軍の
模様を聞て其成敗を思惟する筑前守の軍立す
べく心中辭由及むれず弱冠血氣未定の頃より親
志くせし木下藤吉郎兵人ありずと思ひしが果し
て天下泰平の大將とるべくおぼゆるを長九郎

催促ハ一ていあり北國からぬ諸大将物頭誰ハ
 一人も三七殿をおびさす美濃國の城りさ
 へずべて筑前守お一味くくとうたまはるこ
 れハ筑前守お一味するおてりさふらもず三法師
 君のかんくおまいるおてさあけりあけりこの
 体おて御籠居ハ勝家直お参りて御勞の様を
 見免お角へくハ然ハ著到お入あひく諸城主と
 共お御出陣あるべくハ利長愚案をめぐりハお
 勝家の運ハ末おありつとお思えハ其カへハ勝家
 北國おく處々お戦ハ度々己の刺お觸ていつも
 辰の半お出張一ていハハ諸將の心も自づり

後れどく心かくるとゆえハ然ハ今度美濃
 陣の催ハ三月上旬とありつるおより二月下旬よ
 り用意一さて一左右を待ハゆいまお出馬の沙汰
 由あり是ハ如何ゆとあり不審のそれぬまゝ爰
 迄出張仕り下々の月の、中を聞ハ小谷の御方と
 ヤりんを迎へ入あひく夫お別を惜むとくかく延
 々おありゆとあり昔もさる例あり木曾將軍義仲
 貴女の別れのかあさる粟津の軍お身をほろ不
 一新田中將義貞ハ勾當内侍の色おまよハ足羽の
 土とありあふ何れも運の盡る所左ヤりの魔縁の
 出来るぞや其お小谷の御方ハ三七殿とありともお

住めひし伯母甥の親しき勝家三七殿を援さる
りさやののをも承められ此度の軍ゆハ必柴田
打負ていべし父君ゆハ後陣ゆりりし御工夫られ
やと申されハ利家志づしハりのいそは黙然と
て居たりしが利長を近づけ人ゆや聞め又云こと
ありれ我ゆ左思ひしとよ將驕りて軍危し此月ど
の勝家ハ更ゆ昔の勝家ありは小谷の方ハ訃と云
とも知あもは義と云とも弁へあたるは江州半国
の大將とる淺井の家ハ北の御方たりし御身を持
て家僕の妻とありあふほど御本性なれば家國
の損益ハ知あハし其御心を知あへば故殿の世ハ

おそしあしはる時ハ岐阜の片目とりゆ打こえて
置めひしあり左やりの御方傍ゆりれば利長北庄
ゆ行向ひ勝家ゆ見参せんとさ能心して油断させ
そと諫むれば利長かこより仰の趣心得ては勝
家ハ勝家ゆゆ佐久間玄蕃が舉動こそ誠ゆ心
得がさくいあれ然れ共是ゆ遠からば身を果すべ
こりのと存け此間北國の諸城主とち参會いて濃
洲陣の談議ゆ及びし時玄蕃進みゆけけるハ谷々
ハ免ゆられ盛政ハ筑前と押あられ組て落んと思
ふありと申るるを聞て何れゆ玄蕃ありて筑前と
組ゆの有べからば能しあへやと色代してハいひ

か共利長が心ぬの餘り思慮あさし條と存じ
筑前守母どの大将が二三万の勢を率し出陣し
とれバさぞ段々備へつらん何とて左様ゆ端あ
く佐久間とおし並ぶべらんや是由女蕃が心を天
の満せあふところあれバやあぐ又天の缺さあふ
そぐめあるべし都て天下ハ筑前と存じ父君とハ
舊しとお交の何ひどあり早く御申通じりて家の
安危を謀らせあへと勧めつゝ利長ハ北庄へぞお
りむさける

前田孫四郎先陣所望の事
并北國勢會合の事

天正十一年三月上旬にありて北國雪解け路次開
けりるふより柴田修理進勝家江州表へ出張し羽
柴筑前守と有無の一戦を遂んと北陸道七ヶ國の
うち加賀能登越中越前の城主物頭を催促しける
小より何れも後れしと北庄小馳集る中小も前田
孫四郎利長ハ第一番小到着しけるが折し三月
三日鄙も都もあへるさゝりめさ祝ふ時といひ
殊小ハ小谷の御方御入りり後そぐりるの上巳
ありとる酒宴の家中小混甲めつらりかりる座
敷あり勝家よも快け小打笑ひ例の玉小ハハへ
共孫四郎殿の心をせ深く喜ひ入てゆ七尾よりハ

二月己未三月十一日

七

をるぐ、あり然るれかく早々著陣あり、と尤祝
著とやける時小孫四郎進み出路次の雪猶深々さ
所ゆひひつる小あり存りあがり遅参いさ、ゆ利
長年若くゆへハいあざいくりの戦場を由見ずゆ
修理進殿ハ是まで幾度々由々敷軍の出會あひ御
手柄も數知れずゆべゆれバ御手小付て人數の引
廻しやうより鎧を入れ弓鉄砲の進退あんど御指
南を受むやと存ゆ弱年者の指出がましくゆへ共
江州表へ御出陣の時御先手へ御組入ゆやうお心
かけゆ阿むれ御免を蒙りゆも、やと思入て望み
ゆゆれハ勝家斜ありはよろこび孫四郎殿の武邊

ハ魚津小く大依小見知りてゆこれよりハ實の堅
まるまぐの、と小勝家存この御年齢のころハ左
やう小働さゆとハありやさずゆひさ末代かけて
名譽を傳へあへ但し先手のとハ聊勝家が存する
昔のゆ小あり已小佐久間玄蕃小許してゆ今さら
御邊の所望とり共是を改め難くゆ御邊ハ佐久間
が左右の脇小かせぎあふべ、とぞ沙汰、とり孫
四郎大小喜び如何小由佐入間殿小引副て軍忠を
致しやべ、父小てゆ又左衛門此目ど持病小おか
されて禱上ふゆされバ今度御出陣の時ハおくれ
てゆべゆれ共ゆの小こりへぬ氣性小ゆへハ聊小

て由急りハハ頓て打立べくゆと中ふあり勝
家由かみく父御の病氣の由承り及びく随分療
治油断なく保養致されべくゆ戦半とさ、あハ
ハ必定出陣とるべくゆと中はる小あり佐久間玄
蕃元盛政五千餘人を引率して同月七日北庄を打
立られハ前田孫四郎利長四千餘人佐久間が左右
小副て出陣すその次小柴田修理進勝家の旗本一
の備浅井吉兵衛則政五百餘人二の備宿屋七左衛
門兼清五百餘人その次小山田宗左衛門尉友澄七
百餘人その次小越前本郷の城主安井左近進家清
二千餘人その次小加州御幸塚の城主徳山五兵衛

秀有九百餘人その次ハ旗本組水野助兵衛國春三
百餘人吾彦弥五郎秀住四百餘人その次小越前勝
山の城主柴田三左衛門尉勝政六千餘人佐久間久
右衛門尉安次舎弟源六郎實政四千五百餘人その
次小加州尾山の城主原彦次郎氏次二千五百餘人
其次小越中末森の城主不破彦三元治二千餘人其
次小拜郷五左衛門久光二千餘人その次小水野新
七郎信義四百餘人その次小佐々陸奥守成政総勢
一万三千餘人其次小金森五郎八入道四千餘人其
次小柴田權六郎勝久三千餘人その次ハ修理進勝
家七千五百餘人近習小ハ毛受勝助家照同久右衛

大関己八編卷一七

七

門照景松平甚兵衛則高中村與左衛門武次以下都合六萬餘人近江路さうく發向すれハ此頃加賀能登の間お忍び居さうく浪人共我ちゆくことせ加へるハ青木勘兵衛原勘七郎戸島猪兵衛鷺見源次郎磯貝九郎作毛屋新内をさうくめどさうく打つれく百餘人いづれも軍忠を勸みく所領一所の主とあらんと勇みいさんぐ出立さうく後陣ハ前田又左衛門尉利家五千七百餘人病中なれハ進発の日次由さうくれ同月十二日府中の城より出陣す又北庄の留守居小ハ兒島若狭守祐全を大将とさうく勝家の從弟ありはる柴田弥右衛門勝次溝口半左衛門中村

久兵衛同文荷齋同一露齋これらも宗徒の者さうく譜代の侍五千餘人さうくろき一つあさうく役所々々を守りたり

一書お云柴田勝家越前ハ入部ハ高百石お十人の軍役を充さうくその故ハ百石の田地ハ凡十餘町あり十餘町の作人ハ正丁廿人中男四十人許お當る又十餘町おハ米凡五百俵を得べし麦の類これお准じく知べし依て百石お十人を賜せしあり千石お百人凡石お千人の法と云一書お勝家北の庄を打立はる時城の大手を過はる小乗さうく馬俄お病起り前脚を折て臥志り

バ礮さまぐふいさもりーかど中終其よく
 息絶しりこれを見入る人何あ忌々此度の軍は
 かぐ志とありり云ひ何へり然る小勝家
 これをりのとせだ兼替の馬打のり出る
 が六七町中行越しる時峯の嵐のおろり来て
 松の木音どくくとびびさる小驚さて此馬
 引りけ馳出しるさく見物の老若多く踏れ
 傷く者かすを知らずどあや然れ共勝家ハ世ハ知
 れさ荒馬のりの達人あれハ之由心をとめ
 ず押しるが浅水の橋を渡す時風吹さる小勝
 家が馬の前二町をかりふさせさる旗竿ボツ

キと折れて川水ひひとくーとまり毛受勝助
 とそりより
 我君ハ水の底までうちをびけと云ーッハ同
 久左衛門さ、ゆへず
 鯨あれかむ浪のりくずと舟とあり
 先陣佐久間玄蕃元盛政元より伊賀守勝豊ハ不和
 ありはるが此程伊賀守病死し長濱をハ神谷越中
 守足田左近徳永石見守木下半左衛門内々ハ筑前
 守の命を守りて城中を持固めつる由をさ、悪さ
 奴原のふるまひや只一責めせり落し神谷足田徳
 永木下等が首切くこの年頃の遺恨ををるんを

勇み進んで打れるほど小瀬波湯の尾今庄板鳥木の
日峠を打越して近江国伊香郡中河内椿市小著ハ
雪水よど解やうぬ山坂の悪処も更ふ嫌ひなく北
庄より十六里を二日お打て柳が瀬小陣を取り前
田孫四郎利長ハ佐久間小押ありび柳が瀬の東西
五十餘丁の間を放火しく北国勢の威を示す柳が
瀬より木の本ふいとる餘吾の海邊を右小あしく
二里半それより長濱よと馬渡りうくり姉川曾根
川をとりて三里半都合六里のそころるれハ注
進櫛の歯を引くお似とり長濱おてハ斯と聞より
思ひまうけしとあから筑前守のおもくもハ伊勢

の國へ其よく洩さず告ぐかごも筑前守ハさら小
かどろく色もあく朝夕ハ其りそりの遁世者又
ハ山寺の僧あごを請入れて茶を點し香を翫び
てぞ居たりりり

伊勢の国貝野の里の八幡宮小羽柴筑前守の陣
中の茶屋といふ小座敷あり三疊敷の内お爐り
り爐の切やうハ向切あり勝手の方ハ大目の二
疊敷あり水屋と見ゆ釜ハ車軸の小釜あり蘆屋
の古作あるべし其真偽ハ知ずといへど由古さ
とハ古さりのあり

重修真書太閤記八編卷之十九終

重修真書太閤記八編卷之二十

筑前守秀吉勢州表發向の事

并龜山落城瀧川勢戦死の事

瀧川左近將監一益ハ羽柴筑前守と柴田修理進と
兩雄相争ハ一方ハ傷さ一方ハ死すべしその時
一益奇兵を發し其傷くりのを殺し然して後三七
信孝朝臣を以て天下の上將とあし其身補佐執權
の任を握べしと思惟し勢州鈴鹿郡龜山の城ハ瀧
川三九郎乳母の夫の佐治新助鶉殿齋宮関大藏ハ
三千餘人を添てこれを守りせ嶺の城ハ甥の瀧

川儀大夫詮益を大将とて白子六郎右衛門宮地
左内青地頼母等をもどり二千五百餘人をこ免置
その身ハ素名小在長島へ甥の源八郎および一
族ありはる瀧川彦次郎を残り置素名長島両城を
一人しとて持て入り然れ共素名おハ日置五郎
左衛門尉谷崎忠右衛門山添九郎太夫小林直八岡
部常藏玉井彦総おど究竟の侍七千餘人を加勢お
籠り矢玉薬十分お貯へいと嚴重お楯籠り世の風
聞を聞お筑前守三七殿と和平りていよご月日
を過さるるふ三七殿ふらび諸浪人を名りか
へあひそれ等が説おまかせ籠城へあひ筑前守を

引分てこれを討滅し三法師殿を廢し信孝朝臣右
大臣家の遺跡とらんと思ひ立瀧川茶田お援兵を
請めお音筑前守のあひより入置し聞者ご中が
注進せし加は筑前守大軍を起し美濃國お攻入
舎弟美濃守秀長をし岐阜を圍しむる由を聞
て一益ひそくお思ひ置るハはは婿あがり信孝朝
臣血氣の小勇をたのみく天と時とを知らぬま
人を知らぬこれ自滅の相あり如何で天下の御
後見たる上將の任とするお堪べらんや嗚呼こ
思ひしそ半成ぬし全備お至らぬ惜むべし
と歎息しつゝ定めく勝家おうち出るあらん然ハ

筑前守と青野が原又ハ番場の峠よりゆく軍あり
べー然らんハ勝家うち勝と申士卒多く討せて
其身も弱るべー勝家り負とりと申筑前が日
頃一騎當千とたのみー加藤福島も佐久間が輩
と相打いて多く死傷すべーさくハ両雄とも大ハ
疲れつべー我その弊ふのりて一策を施すべー是
真ハ十死一生の計ありと工夫を凝し居たりけ
るところハ黒田官兵衛孝高小川土佐守伊東掃部
助一柳市助堀尾茂助等六千餘人ハ嶺の城へ蜂須
賀彦右衛門父子堀久太郎秀政仙石權兵衛秀久羽
田長門守義真ハ関安藝守盛信を案内者として五

千餘人龜山の城下へ押寄せハ安樂越より長岡
與一郎忠興中川瀨兵衛清秀を先手の大将と一明
石與四郎大谷慶松木村小隼人以下三千餘人をさ
しそへ二隊に分れく間道を押させその次ハ筑前
守の胴勢一万二十人前後七段ハ備へ後陣ハ淺野
孫兵衛木下左衛門尉赤松彌三郎兵糧小荷駄の奉
行し五千人餘人いつのまふハ神戸白子の邊迄
押来りて陣を取一益この由を聞て大ハ驚き昨日
迄ハ鳥居本番場ハ支へ美濃路ハ向ふと聞たり
筑前守いつの間ハ爰までハ寄りハ人猿冠者
と人の沙汰するハ合せハ實ハ梢を傳ふハ如く不

思議ありける士加ふ然と今ハ如何せん但筑前
 守深々と我領知まで押入て陣を果しハ智者の一
 失と云つべし龜山嶺の西城へ誰を々援兵ハ向べ
 こと評定しはるところへ龜山より雜兵五六人落
 来てヤレるハ筑前守の大勢夜の間ハ人数を城下
 へ押詰在家へ火をあげ焼立ひひつれハ城中の歴
 々いづれハ町人共の手何やまぢあらん早打出て
 消防せよと云ふハ壯者共我劣らトと走り出る
 を矢庭ハ射殺し打倒し仕ハ間こハ何者ぞ狼藉を
 りと云ふへ大旗小旗うちあびかせ多少ハ知らず
 浦ガ如く小寄てハ三九郎殿これハ敵ぞ羽柴筑前

守あり早城戸をうち各持場へ立分れ後所々々
 放埒ハあすとあられと下知しあへハ佐治新助
 関大藏鷄殿齋宮いづれハ大さハ騷とちかく迄
 寄るを知ざりし我々ハ油断あり定めく敵ハ大勢
 あるらめと云程ハあく城下の焼止次第ハつり
 せや四方八面ハ焼うつり二丸三丸の役所々々へ
 火燃舟はるハより関大藏諸勢を下知しく本丸へ
 引籠り爰ハて暫時防ぐ内ハ夜ハ月のかくと曙とこ
 る雲のすさハ敵を見れハ関安藝守真先ハ進み其
 次ハ無の字の旗ハ仙石權兵衛釘貫ハ堀久太郎息
 を由継ず責かゝりハほどハ城中以の外ハ狼狽し

子よ鉄炮よとひりり所へ万字の旗二三流押
立三四千をありゆやうん手と投松明を用意
屋根軒端の差別なく打こみ致し内丸
ハ早焼落されくあり是ハ蜂須賀彦右衛門正勝
ありと沙汰し其次ハ同く万字の旗さし又十
郎家政羽田長門守義真五六千の人数ハ大手を
打破り籠入りハ味方散々打あされ何れハ本
丸へ引籠りゆ其ハ寄手ハ堀際へ竹束を突あ
らへ擁を揺立開のこゑを上り程ハ山林ハ響さく
百千の雷鳴とちやあされハ城中ゆくも漸くハ
物具一開を合せゆハ共何も不意をうされしとて

ハ何り臆病神ふや誘引せられん佐治新助何方へ
落失とりあがりける程ハ寄手三丸を乗破り手
初めと喜いさみ本丸へ取あぐる本丸ゆくハ三
九郎殿并ハ関大藏鶴殿齋宮今ハ是までぞ能せよ
さたあびれハ二度死志とる例ありと大有ぬさハ
ありて働さめハ敵ハ寄ると火をあげ焼さく
焼さくその間より鉄砲を打程ハ味方大ハ打あや
まさる然れ共関大藏必死ハ成て防ぐ月とハ百騎
むかりハ踏止ありハ火箭を以て敵を射る敵ハ大勢
あり城内ハせあし透まろく寄とる所へ射されハ
敵も大ハささ立色めさしハ大藏真先ハ立る

本問已八編三十一

大將討つ終結二十

爰をりや人々と切らあくりあふを寄手の陣より羽田長門守られハ誰蝶のさしりのさしとるハ関大藏おらめ能敵あるぞりらあと下知一つ大勢の中へ取こめられ大藏すぐお討るべかりつと見へ一時三九郎殿関を討すありの共續けと下知せられ二三百計とつと叫て切あくれハ羽田もこりへ兼浮足ありけるを蜂須賀彦右衛門走り来り羽田を助く羽田大お力を得死りの狂ひお切て廻れハ関も三九郎殿も火水ありと戦ひあふ寄手の中より無の字の指物さし仙石權兵衛と名乗三九郎殿お切らあくる三九郎殿悪し下臆め罷

り退けと十文字の鎧を以て投突お突あふ鎧の光りお乗とる馬の驚さて刻上りハ加ハ無慙や三九郎殿鞍おあこれ落あふを權兵衛あけより首を打つ鶉殿ハ斯と見るよりも関安藝守が手へ切あくり一族の好を忘れハ無道人弓箭けと悪へ共其処を退えと突あゝるを堀久太郎傍より関を援はく競ひとち鶉殿を目おかけ戦ハ鶉殿心ハ猛れれど大勢お切立られ遂お爰お討れけり関大藏これを見く東西南北お走り廻り切て落してハ首を求突倒してハ耳を殺ご阿脩羅王の何れとる如く戦ふ程お太刀お打折たり蜂須賀彦右

大將巴八編巻二十

衛門たる加小見舟天晴歌や我討取らんと支りよ
るを関大藏立上り桓武天皇九代の後胤平大相國
入道浄海の孫三位中将資盛の末葉伊勢平氏の正
統小関大藏より首の價ハ一國一城小替つべし思
賞ふとさふれやくと呼ちりく蜂須賀小駈
向ふ蜂須賀これを左ゆけ生擒ゆせんと思ひよ
り一太刀打ぐハ右へもづ二太刀打てハ左へ違
ひ味方の中へ引入んと欺さるるを大藏早く悟り
加ハ鎗を烈しく操出り一足中引ず戦ふと彦
右衛門家政討りりくハ殘念ありと一聲おめい
く突入れハ何やまことす大藏ハ胸板のをづれより

押舟の板まで穂先白く突出り痛手なれば何
加ハ以てたまるべき馬より落ちて死しぬり
関氏系苗ふ三位中将資盛十四歳の時嘉應二年
正月十六日殿下小乗合去つる過ゆり伊勢國
鈴鹿郡関谷と云外小流され六年住居しぬり安
元元年御赦を蒙りて上洛しぬり時當歳の男
子あり後小関谷民部大夫盛國といひしハ是し
盛國の子實忠左近衛の將監なり其子関太郎盛
忠其子盛勝入左近衛の將監なりこの時始めて
龜山の城を築てこゝ小住す盛勝より後十三代
相續しこゝ小住すとゆへり

大関氏系苗ふ三位

一

かゝりしは、彼ハ筑前守の勢いくらとあく籠入のハ
より龜山の終ハ落城ハ及びハと注進す

瀧川儀太夫小旗の奇計の事

并嶺落城の事

嶺城と云ハ平資盛十代関四郎盛政ハ五人の男子
有り長男盛澄関太郎と云伊勢國神戸ハ住す次男
盛門國府ハ住す三男盛重龜山ハ住す四男盛宗鹿
伏免ハ住す五男政實嶺ハ住す嶺五郎と称すこの
政實もいやく築さしハあり後々ハ長門守といふ
尊氏將軍ハ從ハ処々ハ軍忠有りけるハあり鈴
鹿郡原川崎以下十餘郷を勲功の賞ハ賜り奉

子孫相續しこれヲ領す然るハ瀧川左近將監
兼名長島を領し北伊勢を所務するハあり當城ハ
ハ瀧川儀太夫詮益をこぞ置しハあり儀太夫ハ然
勇士めく子矢の功者あると多く人ハ譲らず然ハ
一益也一方の大將ハ頼みハあり然れども筑前守
加サリに手早く押寄んとハあけくも思ひよらぬ
とるハ流石の儀太夫ハ大ハ周章ハよづ足輕を
引分け堀の狭間を切ひりと鉄砲さびし打出一
てこれを防ぐハ寄手の大將黒田官兵衛伊藤掃
部助一柳市助小川土佐守堀尾茂助六千餘人の勢
を以て城の前門をとり圍み関を作り鉄砲火箭を

射かけ只一撃おりの破らんといひしり儀太夫
矢倉おかけ上り四方を見こすお方三四丁お足
ぬ小城あるを五六千人の勢めく取巻つれば鳥あ
らぐ遁れ出べし透間もあし儀太夫餘りお呆れし
て儲りく筑前守かやうお手早くいつの間おハ
寄とりせんこれ程のとを心も付ぐ有るうとく
さよ何さよ天のゆるせる大将ぞか我々分際
めくこの人を敵おうはこるハ手柄と云つべし去
とくこの儘お止べしありくと持場くの手配り
しくはる儀太夫擧お立りもれ三尺ぞかりの
小旗を取て右と左へ振立られハ不思議や遙うお

とさの聲五六万の人数めく揚るが如くさこえし
かハ堀尾茂助黒田官兵衛お向ひ儀太夫が只今お
りたる小旗こそ怪しけれその上お何の開のこえ
是ハ敵ての合番おて後巻の何るあらめ其用意し
て攻べしとちと攻口を引のさるるを見て城中よ
りハすハや敵ハ引のくぞ其処をのがすお打拂へ
やと城門を開て掛しハ小川伊藤が侍と由五六
十人やおハお討れく崩れとら此小旗ハ元より相
番のとえお非ず儀太夫が俄お思ひ解しとるれ
ハ味方ハ更おその意をえんされども是輕どもの
配りよく弓鉄砲を射出しつれば敵ハ相番と思ひ

六月己酉編卷二

七

大段言ハ紛者ニ

一ところへ龜山落城のときこの聲を峯の後援と何
チりし寄手とづか引退しを城中めくハ寄手
の内變出來しるらん互思ひちかへし宮
地左内白子六郎右衛門鑓長刀の鋒をそろへく面
もふらぐをせ出せれハ宮地うとす白子力
合せよと叫さ喚んで切あくる黒田官兵衛これを
見てこれをありのり共追立られし見苦しこ
りれ打とれと下知すれハ黒田が手の者二三百人
兜のまころをかこめけ鎗を膝取居て一足引
くと突あくる堀尾茂助今ハよき時かぞえれか
れと聲かけく宮地白子ハ横合あり切あくる宮地

白子も續く勢ハあ軍ハ思ふほどあし
引入らんと思ひくハ右ハ突立左ハ切まくり豎
横十文字ハ打拂ひく城中さし引返しはるを黒
田一柳の勢共漏さしと追かけたり宮地白子も手
ハ負つ味方ハ多く打れとりりひく引はるが
宮地ハ難あく木戸を入るハ白子ハ馬何ハ驚ま
りん堀の際ハ後足を折伏はるハあり六郎右
衛門手綱を引しり乗直さんとせし処へ堀尾が手
の者落合終ふこハ討れり城中ハ儀太
夫一人もしり廻り士卒を下知し引鉄砲をさび
く射出し防ぎはるハあり寄手左右多く破りえ

大段言ハ紛者ニ

由自然と盡了期あるべし然らば籠城のりのども
 弓矢の上よりで飢渴小身を母ろぼさん如何
 由口惜かるべし其上小この節衆名長島と由小難
 儀家中あり早く城をこそく衆名いさう左近
 小力を合すべしといませ其後一人衆名よりの使
 者を仕立左近将監自筆の状をこそすべしとあり
 その計策ハあすうくとや舎ありくハ黒田堀尾心
 得てその通り小ありける小とくく瀧川儀太夫
 青地頼母ヲ合とそその夜城中の兵士を出し其のち
 儀太夫頼母もづつ小四五十人を引具し衆名をさ
 しく落れれば嶺の城ハ忽ち落去しとありけり

一書小龜山小籠るハ尾州大野の佐治新助二千
 ばうりあり太閤の人数一万餘あり天正十一年
 閏正月廿四日あり攻めり十日あり軍一り
 了小城終小落しつハ佐治長島へ落行とあり一益
 大由怒り腹切らせ龜山へハ信雄より人数を入
 置しとあり瀧川儀太夫ハ高松の城あり軍兵
 千二百人ありとし太閤より羽柴小一郎三好
 孫七郎仙石權兵衛木村常陸介脇坂甚内服部衆
 女筒井順慶八千餘あり攻と云ども儀太夫より
 戦ふく落城せだ四十五六日攻れ共落ず金堀小
 城を母らせける小城中より由同く堀て互小

堀^{ほり}をく^くし^し時^{とき}鉄砲^{てつぱう}の薬^{くすり}火^ひをあ^あけ^けく^く攻^せ戦^{せん}ひ^ひと
あり^{あり}太閤^{たいこう}茶田^{ちだ}出張^{しゅちやう}と聞^きて江^え北^{きた}へ引^ひ返^{かへ}し^し夫^{つま}より
瀧川^{たきがわ}左^{ひだり}近^{ちか}の手^てを入^いれ^れ自^よ筆^{ひつ}の状^{じやう}を以^もつ^つ儀^ぎ太^{たい}夫^ふの
説^{せつ}と雖^{なほ}儀^ぎ太^{たい}夫^ふ承^{しょう}知^ちら^らば是^{こゝ}れ小^こ於^お左^{ひだり}近^{ちか}をバ^ばせ^せひ
共^{とも}打^{うち}果^ぐすべ^べし^し儀^ぎ太^{たい}夫^ふハ此^{こゝ}方^{かた}へ来^きれ^れ五^ご万^{まん}石^{せき}遣^{せん}す
べ^べし^しと云^い儀^ぎ太^{たい}夫^ふ答^{こた}へ^へ云^い五^ご万^{まん}石^{せき}ハさ^さら^らか^かろ^ろか^か百^{ひゃく}
万^{まん}石^{せき}少^{すく}くも志^{こころざし}をバ^ば變^{かへ}ぢ^ぢん^ん一^{ひと}益^{えき}の生^いる^る有^あ内^{うち}ハ之^{これ}
を魁^{くわい}つ^つぐ^ぐべ^べし^しと云^い太^{たい}閤^{かく}より左^{ひだり}程^{ほど}見^み継^{つぎ}とく^くハ武^ぶ
士^しを止^{とど}め^め町^{まち}人^{ひと}の^のろ^ろれ^れ是^{こゝ}れ本^{もと}價^ねふ^ふす^すべ^べし^しと云^い黄^{わう}
金^{こん}二^に千^{せん}枚^{まい}を^を与^よへ^へら^られ^れし^しと云^い

重修真書太閤記八編卷之二十終

重修真書太閤記八編卷之廿一

瀧川左近將監従来名出張の事

并中川瀬兵衛尉合戦の事

天正十一年三月朔日羽柴筑前守神戸白子の間小
陣を取り来名長島両城を抱へし三七殿の御味方
とる瀧川左近將監を攻潰さんとり来名近邊へ足
輕の内夜討の馴とる者を勝りて二三百人又ハ四
五百人宛働うて民屋を放火しける小より其邊の
人民安堵せず親子兄弟已が様々山林へ逃加れ
財宝重器を東西南北小持運ぶ有さま真小目も當

りれぬ其騒動大方ありざれハ速小乗名長島へ聞
 えたるより是を謚めん為谷崎忠右衛門山路九
 郎大夫岡部常藏三人を大将とし足輕百五十人雜
 兵三百餘人をさづけく乗名を打出し共筑前守
 の足輕共ハ爰に放火し彼處を乱妨し颯とかけく
 ハ颯と引進退よと小自由ありされハ乗名勢い
 人共為べき様あく只焼立られし跡へくと馳廻り
 氣疲れ力撓みく苦敷あり其由を乗名小告て接
 兵を請はるより左近将監肝を消し餘りと云ハ
 悪き筑前守か其儀ありハ此方より逆寄し筑
 前ガ本陣を打破るべしとて谷崎山路岡部三人を

先陣とし一益二の手小備へ秀吉の本陣とし白子
 をさし發向す筑前守ハ此由を聞て大谷村上明
 石ガ輩三百餘人ハ在々村々残りあく放火させ又
 別小羽柴於次丸秀勝を大将とし乗山修理亮中村
 孫平次加藤孫六以下二千餘人を差副白子の濱よ
 り兵船十餘艘小取乗乗名をさしく押出させ其跡
 より高山右近大夫を大将としく千五百餘人これ
 由船小く長島の沖を志して走らせり其後中川
 瀬兵衛を先陣とし其次小長岡與一郎其次小生駒
 勘解由蜂屋出羽守平野權平と段々小備へさせい
 づれの陣小く五色の吹貫瓢箪の馬印を立しり龍

川方の先陣谷崎山路岡部の三人小高き岡小打上
 り見濟せば五色の吹貫風小飄りまて小綺羅々々
 若くぞ見へたりりすまや筑前守真先小打出と
 るぞ勢ハ聞一程もあさぞ引包んでみお殺しおせ
 よと旬りくさばめさ連て打出し間近ありて能
 々みぬバ跡小連くも五色の吹貫吹流し飄とんの
 馬印を押し立とり是ハ如何小と見る目どお其阿と
 よりも同く五色の吹貫飄とんの馬印いくつ共
 あく駈つづく龍川勢ハ仰天一然バ筑前守の在処
 ハいづくととめらふ処へ羽柴方の先陣中川瀬兵
 衛清秀とてととあく行逢ふとり双方期しとると

あれバ互小鉄炮を打かけ煙の下りり瀬兵衛が身
 淵之助真先小進で鐘を入今日の一番鐘中川淵之
 助あり後小争ふると声かけ十文字の鐘を二ふり
 三ふり振々と見ぬバ瀧川が先陣の物頭山路九郎
 太夫を突落し首を取んとかけよる処を山路が組
 の足輕共淵之助を中取込我打取んとひりめさ
 ばるを見て瀬兵衛清秀走り来り縦横十文字小突
 伏せく終小淵之助を援り是を軍の初めく瀧川
 方の谷崎忠右衛門ハ五色の吹貫を筑前守の旗本
 と見くられバ一千餘人を真丸小備へ中川が千五
 百人を突破りさて後筑前守の旗本へ切りかくり

むやと思案一陰の闇ひく陽の閉追めぐるく戦ひ
 なるが瀬兵衛ハ聞へるとる勇士あり谷崎と見るよ
 り一番の鎗を取ら駈向ひ面中ふらず戦へバ忠右
 衛門中川を目あせ引あすゝめと突合とり中
 川小右衛門同李兵衛瀬兵衛ふつゞひく突あくり
 或ハ前或ハ後ハ顯れつ又かくれつ働くほど小
 瀬兵衛いよく力をえく大音の谷崎ハ人数の配ハ
 例の謙信ハ龍の丸備と云りのぞ爰を破れとかめ
 さ叫んで走り廻るほど小終小忠右衛門が備を突
 崩し、加バ谷崎猛いと云へども大勢ハ引立られ
 六七町ほど引退とりされども勝れとる勇士あ

れハ我備を立直さんとするを見く岡部常藏入
 加より如何の谷崎との息継めへ去むく岡部が請
 取んと云より早く切く入る中川勢ハ谷崎ハ手の
 色めさしを見るよりやすハや敵ハ引色まるぞ道
 すまじきぞ進めくとせり立れハ岡部常藏こらへ
 加の思をば突負一二町ハ引下り森を小楯小息を
 つぐ此間の谷崎り返り中川勢の勝小乗とる其
 中へ真一文宇ハ突て入中川勢ハ大勢より谷崎を
 中ハ取こめ八方より切く加ゝる忠右衛門心を
 りハをやれ共味方ハ次第ハ打れく續く者あく敵
 ハ頻ハ声を上げて勇みとつ谷崎すぐハ討るべり

はる小谷崎が馬跳りヒリくあく敵を踏はるが如
何にう志らんつむぢ風のおろすが如く引けりて
八九丁ぞもりりり中川勢猛れ共馬おつやく
りのあかりーバ希有おして谷崎うとれず退小
りり瀧川左近将監ハ先陣の軍敗軍せし曲を聞と
其まゝ馬を真先ハ駈出一鞭のつれハ瀧川が郎
等倉知仁太夫室山備中守水島左一兵衛海老名十
左衛門等我かとりと士卒を追立く先手をさ
て馳出す一益ハ先手小近づと鞍上ハ立上り味方
を見こせバ谷崎いもど討れず大よりハあり
て戦居とり左近将監これを見て大ハ喜バ中川が

勝目こつたる其中へ面もふらず横合より切てか
りる中川勢ハ谷崎岡部と切勝勢とけるその中へ
瀧川左近が荒手の兵潮の湧り如く押かゝれハ中
川瀬兵衛さつと見く瀧川左近ござんあれりあ
あしと大手をひりけて駈入りあぐり矢小をに五
六騎突倒セバ瀧川勢中を閑さ左右へむつとかれ
りり中川が郎等熊田喜三右衛門市浦長兵衛大崎
島右衛門こゝを詮度と戦へバ瀧川勢もりく餘
右と左へ引退くを中川淵之助同小右衛門同本兵
衛餘すまどと攻かゝる然共一益士卒を進め暫時
こらへよ中川とて由鬼神ハ何り死るハ一度各

ハ萬代我小繼けと切廻れハ中川勢又切かへされ
て見えざるを二陣小扣へ細川與一郎生年廿二
歳今ハいつまでとめらふ屋さか、ゆくと声かけ
て馬の頭を立直せば長岡助右衛門清水縫殿三淵
平馬先二千五百餘人田中の啜道畔と云を代瀧
川ヶ後を断んとかゝ廻せば中川いよゝ力を得て
討きも切をも物のかざとせは乗越く戦ふと
左近將監ハ細川小跡を取切られと前後を氣づ
かひ働ハ自然と備もみどれとち軍難儀小見えと
りなり

小瀬浦菴本小秀吉卿遠慮しめふ様残雪深き内

小よつ瀧川左近將監を押し詰居させ其後美濃
國小發向一彌國中の人質等を堅く取しめ三月
より柴田小向ふべきとの規定し正月十一日諸
國出陣の廻文有り来十五日より廿日の間遠近
小従ひ日並を追て立出られ宿々さし合さる様
尤小江州草津邊わいて勢揃し勢州表へ乱入
すべさの條彼地小於て可相待との廻文し各々
日限小先立ハられ共運參ハあし秀吉小性馬廻
り弓鉄砲一万五千の著到して正月廿三日江南
小著陣総軍勢七万余騎を三手小分土岐多良口
より乱入しめふハ羽柴美濃守筒井順慶伊藤掃

部助氏家左京亮稻葉伊豫守その勢二万五千
君畑越より押入勢ハ三好孫七郎殿中村孫平次
堀尾茂助その勢二萬餘騎之秀吉ハ三万餘騎を
引率一安樂越小か、りて乱入しあふ云云二月
七日北國勢出張の注進ある小あり八日龜山の
城あり江北さして打せあひ十日の暮日と小長
濱小著とみり
長岡與一郎忠興援兵の事

并瀧川勢敗走の事

長岡與市郎忠興瀧川勢の横合小か、りて無二無
三小突立し、バ中川瀨兵衛尉が手の者大小勢を

増一競ひ進んで戦ひるを見て清秀聲荒り、小
熊田市浦大瀧ハかさり長岡衆ハ負るまつバけと
下知し、れバ承せりぬとわりへ、何れも瀧川
勢ハせり舟透間あ、く突か、け、く切合し、バ左邊將
監心ハ猛くを、サ、れ共入替るべ、き味方ハあ、り戦ひ
小ハ疲れ、り退と、ハあ、り小又三四丁追立られ討
死する、りの數を、ちり、ば、これ共一益少、屈せ、ば、自
身鎗を取て四方四隅ハ突か、りける形勢ハ、万夫
不當の勇士と見え、りけり長岡の勢いづれも荒
手、りて然、も度、々手柄を、頭、を、り、と、る覺の者、と、由
る、れ、バ、適、さ、り、遣、下、と、攻、舟、と、り、さ、す、か、の、一、益、得、と

何とてり、餘一、方打破て引返さバヤと山手を見
 れハ長岡助右衛門三淵平馬元清水縫殿千餘人を
 三、引引け龍川、後を断んと近舟寄、龍川勢大
 小、仰天、歸路を断れ、かゝと、自子若松小倉
 の濱邊をさ、散乱す谷崎忠右衛門岡部常藏倉
 地左、大入室山備中水島左一兵衛海老名十左衛門
 そ、り廻り落行み、く、を制、く、長岡勢、小切て入
 面、中振ず戦ふ、と、岡部倉地ハ、大力の打、りの達者
 室山、水島ハ、世、小聞えと、る、鎗の名人あり、長岡勢、す
 で、小突立らる、べく見え、は、る、と、與一郎忠興、遠、く、小
 見、舟、爰、こそ、大事の処、あ、れ、い、で、某、一、軍、仕、く、見、す、べ

さ、そこ、云、ま、い、小、山、鳥、の、尾、の、前、立、と、る、兎、を、猪、首
 小、著、て、三、尺、を、か、り、の、長、身、の、鎗、の、血、小、染、り、と、る、を
 打、あ、り、く、人、な、き、所、を、行、が、如、く、龍、川、勢、の、引、返、す、小
 向、ふ、く、突、合、は、る、が、目、の、前、小、六、七、人、を、突、ふ、せ、死、骸
 小、腰、あ、け、扇、開、り、く、打、つ、か、ひ、味、方、小、向、ひ、軍、ハ、か、く
 こ、そ、す、れ、と、氣、色、を、み、く、見、え、ぬ、り、龍、川、方、小、ハ、之
 を、み、て、悪、く、長、岡、与、一、郎、い、で、打、落、し、く、呉、ん、ず、と、鉄
 砲、の、名、譽、を、得、と、る、足、輕、小、雲、林、院、小、六、と、云、り、の、三
 十、目、玉、の、強、藥、小、て、ぬ、り、以、濟、し、切、く、を、あ、す、折、し、も
 忠、興、草、鞋、の、紐、を、結、む、ん、と、ち、と、う、つ、伏、し、は、る、兎、の
 上、三、四、寸、を、か、り、越、と、り、小、六、鉄、砲、あ、げ、す、て、是、迄

某々見當りしものを打損ぜし例ありしれ天授の
名人々々年若ひぬハ一定天下の大將軍我々式
が及むぬと云々と云々や今も猶白子小雲林院と
云者有りくそれの家小ぞ傳へたる忠興紐を結び
そく又立上り加の鎗を取り早く瀧川勢小走り
舟さ一人を突倒し一人を片手打切伏せれハ長
岡助右衛門よとに見ど小見えぬ併大將軍の左
方う小手を下しぬふと勿体あり御物具を敵見知
てやゆせんずらんと云ふハ在家の小家小立入
主従衣替て出ぬハ又瀧川勢小追かゝる瀧川が勢
共今ハ叶せりと右往左往小落行を倉地海老名室

山水島引返し追來敵を追拂ひく戦ひはるを平野
權平長泰本陣より使小來り是も同く長岡と共
小瀧川を追かけはるが弓と矢取て打番が切て
放せば一益が吹返しを射削り兜の緒を射切りと
りしハバ兜ハ下へ落とりり一益大の驚き身を
鞍上よりつ伏て二の矢を避る長泰ハ一の矢射損
し無念あり二の矢ふくハ必定と能引ひせりと放
せば倉地が鎧を射貫き水島左一兵衛が押舟の板
より胸板けけ矢先白く射出しとれハ何々ハ以て
たまるべき馬小由こりへずどうと落ちそのあハ
息ハ絶とりり瀧川左近危ふ命を拾へりと弥

六月己未編卷十一

七

馬を早めて落口けバ中川も長岡も日ハ已小くぬ
 かゝる軍ハ是までありと引かへす長泰ハ瀧川ガ
 兎をりせせく本陣へ参上し御使歸参の御土産と
 さし出せば秀吉大ハ悦び權平ハ當座の褒美を
 賜はりぬれバ長泰大ハ面目を施しり然るお瀧
 川左近將監ハ虎口をのぐれ落行はる処へ長岡助
 右衛門清水縫殿三淵平馬丸かゝり瀧川ガ後
 陣を討んと計りしとまぬバ一村林の茂み小待り
 け鉄砲を打ち煙の下より鎗をいれ予の衆ハ鎗
 脇をかせざれるおより瀧川ガ勢共大ハ乱れとち
 進むお加とく退くお叶はず只茫然と立とる処へ

長岡助右衛門時分ハ熊ぞと切てあゝる瀧川方七
 八騎切伏せられ色めさ立バ谷崎忠右衛門岡部常
 藏おま止まり悪し長岡助右衛門其儀あらハいで
 りの見せんと云ふに四尺五寸の太刀を以て拂
 ひ切小切せらひひく進みはるを清水と三淵と左右
 より見事ハ攘舞あふりの加あいご御首を給をり
 んと鞆を頒けひと突お突合り岡部ハ今日を限
 りと死の狂ひのの警へいそふあり岩小碎
 くる白玉の飛ガ如くお見え小りり合戦已小時後
 り鎧お立つ矢ハ叢毛の如く火花を散して追廻り
 おひりぐり突つ突つれつ戦ひは三淵ガ打掛る

長刀を岡部ハ袖ゆけ損じ肩先深く切こまれと
り三淵得とりと踏込で拜み切終小首を打落す海
老名十左衛門ハ四五丁のびとり及傍輩の討さ
るを見く引返し二尺をかりの大十文字鎗を引加
とげ是ハ瀧川左近将監ガ侍小海老名とヤリもの
本國ハ相模國武者修行し當國お止まり瀧川ハ
請とる思ハ海より由深く山より由高し今日爰ハ
討死し日頃の報を為すべさあり敵ハ千餘人首ハ
一つ手柄者ぞんぬ若ぬへやと云々と見ればそや
長岡勢の中へ切入く猪の荒るゝが如く突てハ加
けかけてハ突らさぬより長岡衆少し白けて見え

小はり清水縫殿かくと見るより能敵ありこれを
討ずハ有まといぞ我等老とれハ今生の思ひ出小
とつぶやよく三尺四寸の太刀を抜かざし海老名
どの見参せんと走りかゝる海老名これを見て左
云ハ誰と問へハ長岡衆小清水縫殿年つりて六
十三孫ハ由欲しき海老名どのと云々と思へバ打
合す太刀の光りハ電ガ目さゝく程中何らかの
ひびき合とる鎗先より火を出してぞ戦ひはり清
水ハ老功海老名ハ勇士双方牛角の勢小て透間有
とハ見えざりなり海老名大音け煮てより其名
の聞へし清水とのかたやれぞ討取て瀧川へ

六月廿八編卷十一

二

土産小せんとかみひく突出す鎗の塩首を清水ハ
太刀小てまつと切る切れ鎗ハ六七間左りの
方へ飛散とり海老名す々さす太刀を抜てをり
かゝるを遣り違へ清水打こむ太刀鋒小海老名
ハ弓手の肩先八九寸切下られ其も、そこへ倒る
れハ清水ハ首を打りり是等討る、其ひまに
一益やうく切脱く素名をさして引ありぞく長岡
衆も其のちハ數刺の戦ひ小疲れされハ討取一首
太刀長刀の鋒小さ一貫さ本陣小到り實檢小備へ
一かバ筑前守一々小これを見分ハ功を勞一賞を
つづくるとり去るハ何れもく陰日あさかさ大

将やとみお人と小感トつ、明日の軍をよち己
て思ひく小休息せり

江州甲賀瀧川系畠小大原中務少輔資守の次男
を瀧川三左衛門資清と云後小左近将監といふ
資清の次男を瀧川三郎左衛門景清と云その子
三左衛門資恒その弟瀧川小次郎景貞その子儀
太夫詮益その子を左助と云三左衛門資恒の長
男を勝三郎恒興と云池田紀伊守恒利の子と
り池田勝三郎信輝といふ恒興の兄を瀧川三郎
左衛門と云一々早世ハこれハ彦右衛門一益後
小左近将監といふその本生ハ何處の人知す

と云

又一書小ハ近江國甲賀郡茶山寺小雲水の僧
り頗る力量有りければ大原茶すゝえく還俗也
者め我一族瀧川の跡を繼せしと云り

重修真書太問記八編卷之廿一終

